

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 147: 58-66
Issue date	1912-11-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6403">http://hdl.handle.net/2298/6403</a>
Right	

雜報

卒業生氏名

(○京都 △九州)

第一部甲類

- 中原 不郎、近藤 駿介、篠崎 良造
- 阿部 普、新田 宗雄、薄田 良二
- 池部 武雄、伊藤 耕作、笠野 泉
- 國吉 真現、山崎德太郎、佐藤 敏人
- 橋本 定、原 邦造、小田 精一
- 赤間吉三郎、小邦 勇藏、德島 定雄
- 財津 哲雄、板垣 政治、玉井 幹一
- 瀨川 成一、伊藤 爽哉、宮田 景治
- 江橋 修、野口 松一、川原 昇
- 篠田 英一、石原 隆、小柳 又一
- 高橋 健、波多江一彦、坂内 義雄
- 薩垣 匡、渡邊 獎、前谷庫太郎
- 謝花 寬濟、○長友 安夫、林 定良
- 戸島富三郎、松本榮五郎、藤山 一雄

- 阿部 正胤、野田 義衛、○本田 德純
- 山内伴三郎、大場俊太郎、○横山 通曉
- 菊池 行夫、本丸 重郎、○佐藤 敦
- 犬童 治利、小林秀一郎、○山本 義秋
- 石川 善盛、青柳 讓、細川 隆志
- 黒木平三郎、吉鹿 善郎、○森谷 頼人
- 稻村 眞介、永田 顯士、○石田 菜
- 篠田 千藏

第一部乙類

- 古賀 行義、中城 隄、藤原 静一
- 植木 殖、中川 泰雄、○綾部健太郎
- 岡村 良爾、○家村 未熊、○松田 季男
- 園田 清、小笠原行照、湯本 五郎
- 香川 晃、江口 渙、○中田 武直
- 玉井 徳和、○古市 春彦、大槻 厚明
- 古川 竹二、浦霧 末松、○阿部憲太郎
- 鈴木理一郎、○島本 桃一、加藤 空月
- 土田 冶臣、古賀 映、○夏秋 嘉行

第一部丙類

- 和田 徹、小山 忠秋、上内 彦策

末澤勝太郎、○石川 豊記、上村 友繁、保々 隆基、

○西田 太郎、○平瀬 米藏、二神廣太郎、△白石國太郎、

長谷川庄之介、樋野權一郎、高田 行藏、春日屋關男、△矢野 公一、○西尾 卓爾、

樋口 芳包、○永清 時藏、荒木信太郎、△太田 浩、鈴木 廣武、△重野 定之、

○小田 三平、○種田讀太郎、○久村 秀次、△古閑 雄次、○松浦正五郎、渡邊 修、

○中村 浩、○緒方 弘、○今藤 馨、△神嶋 滿足、△坪内 正吉、△小旗 徹、

井上 庫定、○天辰 正守、里見 雄二、○小田部 毅、△濱田 忍、

第二部甲類 五十九、△神谷 貞夫、○吉川 留喜、△深水 壽、

小旗 徹、吉田孝太郎、中島 修七、與柁菊太郎、

伊藤 靜雄、金子卯一郎、新村 盛造、長曾我部健男、山村 敬一、小出 亮、

富永 耿一、立花貫一郎、内野 正夫、矢島 慧、山本 平吾、大屋 多城、

○坂本 敏彦、市川孝太郎、江川 軍次、武田 信齋、楠田 詳象、吉村 市郎、

森田 正見、田中 健次、金坂 昇、酒田 喜八、永富 保二、田中 長民、

田淵 壽郎、八根本 勇、坂本 彬、井手 讓式、北村 秀一、成松 明秀、

△山川 良一、△井村 竹市、井手 讓式、井芹 正、不志 友二、恒久 清彦、興津 壯、

川畑 武熊、松田德太郎、△川口煥五郎、黑澤 慎介、太田 信彦、森 安勇、

△末松陸太郎、納富 耕、△進 來 要、高橋 隆道、宮上 龜七、安東 壯、

△江並 貫一、△澁江 武、里村 靜一、香川 冬夫、名和 見幾、鬼塚 兵三、

△中垣 實、△金坂 昇、野村 健彦、明永久次郎、鈴木 正達、宮内源太郎、

△山領 季雄、△志道 鐵造、△大場獸之介、

堀 子彦、内山 唯一、中村 重雄、

第三部 二十八人

福田 得志、林 敏郎、原 隼人、

宮川 量、○赤松 信廣、内田 壽、

豊田 榮、半田 勇、○榑原政三郎、

矢野川四郎、○高森 時雄、宮下 忠雄、

酒井並三郎、大久保九牛、○小島 三郎、

○岩永 仁雄、○清田 醇、○山本 專平、

橋本 喬、○村田 鷹一、○佐藤 善平、

△江副 民也、△坂田 敬之、○秦 英雄、

○平井 昌、△山本 守部、△星子修太郎、

○佐藤 清熊、△伊予田農夫、△安日 新、

△川畑 静彦、△高澤 彰、△高城 見國、

△川原 久、△赤木 泰二、△加來 公輔、

△執行 作熊、△橋本 深一、

東京御大葬奉拜の記

大津 留生

九月四日朝、東京に於ける大葬に奉拜のため上京ありたしてふ意外の報を得て、且は驚き且は欣びぬ。

越れて八日出熊して用を濟し、九日午前二時上熊本驛發上り列車に投せんとて午前一時同驛に臻れば、第六師團各聯隊各一分隊聯隊旗を擁して、森嚴靜肅の裡に相前後して來り、其他幾多の貴紳も薄暗き電燈の下に見うけぬ。待つ間程なく、疾風の如く走り來れる列車に投すれば、初秋の空寒き朝、凍りて響く汽笛は草木の夢を破る、糺糊たる藤崎臺の彼方を顧りみ、銀杏城頭を名残りに火輪は徐々と北走し初めぬ。思は遠く三百里外九重の雲深き邊りに馳せ、只旅情の徒然なるを、かこつのみなりき。千代松原の翠縁に黎明の清爽を覺わ、枝光門司の喧囂に今更の如く其隆昌を愕きつゝ關門海峽を越わたるは、八時過ぐる比ひなりき。下の關發急行列車に移乗すれば満車の者始ご新橋行。然も列車の進行と共に各驛より乗車するものゝみにして眞に文字の如く立錐の餘地なかりき。かくの如くにして須磨舞子の景致も、大阪京都の雜鬧も夜の間に走り、濱松を過ぐる比夜は全く明けぬ。折しもあれ天は曇り風さへ加はり、雨は横ざまに玻璃窓を打ちて車外に佇立せる余等は雨と煤烟とのために苦しさ言はん方なし、列車の進

行遅々たるに問へば御殿場に近しといふ、黒風白雨の裡に富士を描いて獨り怨むが如く慰むるに似たり。馳て品川磯頭各國艦船の浮べるを右に眺めつゝ午後三時、新橋停車場に着きぬ、迎へつゝ水野、豊田其他の友人に會釋しつゝ始めて東京を見たる田舎漢は導かるゝまゝに電車を驅りて本郷菊坂町の旅宿に投じぬ。當夜校長を神田三崎町森田館に訪へば高島總務先づ在り、親しく來意を告げ且つは注意要項を拜承し、只管降りず降らずみの漆黒の空を仰いで願くば晴れてん空よと祈りぬ。九時過ぎ去る。

十一日、終日降り籠められて晴るべくもあらず、半田、大久保、水野諸兄の訪はるゝまゝに語り暮しぬ。十二日、曇、午前九時校長を訪へば恰も好し、川邊、福島、高島の三君と相會す、同道して文部省に出頭し第五高等學校生徒の總代の面着を終へ生徒參拜心得等を得て歸る。

十三日、青人草が泣く涙雲と凝り雨と降り暮せる秋の空、今日しも名残なく晴れて初秋の光晶々と照り出せるは聖徳八紘に遍き、聖靈が、今日の行幸を神明の加護せさせ給へるにやと畏き極みなり。齊戒沐

浴して中食を終へ、行厨を携へて宿を出でしは午後一時なりき、文部省に至れば在京五高生七、八も來り加はりぬ、規定の控所には京都帝大を始め地方各直轄學校即ち各高等學校及農、工、商、醫、水産、等各十數名グループをなして芝生に坐せり、馳て文部省當局の訓令指揮によりて順次二重橋前右側第一の芝生に導かれぬ、時正に四時なり。打清められたる御通路兩側四個の大芝生は緑の色滴たらんが如く六万の都下各種學校生徒の奉拜場と定められたり、午後五時に至れば一隊の塔列兵、隊伍を組んで御通路の兩側に立ち並ぶと見る間に今日の儀仗に加はるべき眞紅の上衣に黒のズボンを穿ち白毛を飾れる軍帽を戴ける海軍々樂隊を先頭に數千の水兵及紅帽白衣の近衛の軍樂隊を先頭に近衛師團兵約二万學生團の集合せる芝生を廻りて馬蹄形に整列す、暮色漸く追りて稍空腹を訴ふれば顧みて在東大五高出身の先輩諸氏と綠濃き松の根に舊濶を暖めつゝ晚餐の行厨を開く、涼風一陣肅殺の氣に滿ち坐るに寒冷を覺わしめぬ。御道筋に立て列ねたる短檠に焚く瓦斯篝火の光漸く色を放ち幾千百の電燈明煌々として宛然不夜

城の觀あらしむ、二重橋際に沿ひては今日の鹵薄に  
 加はるべき文武官盛裝して二列に整列せり、禮帽に  
 附けたる白羽は秋の薄と戦ぎ燦爛たる金モールは天  
 漢の星と輝きぬ、更に眼を大内山の彼方に放てば今  
 しも吹き散らんする弦月は淡く冷かに老松の枝に懸  
 りて得もいはぬ風情に少時は我れを忘れたりき。時  
 は移りて七時比に至れば月已に落ち蒼茫たる夜色愁  
 に鎖す大内山を包み天地悉く聲を潜め凄凉の氣胸に  
 迫る、七時三十分此寂寞を破つて忽ち一道の哀音は  
 近衛軍樂隊の間より起る細く長く立ち上る「哀の曲」  
 は切々啣々滿目肅然水を打ちたるが如し、悲しき笛  
 の音は細く遠く、やがて死せるが如き闇の中に消ぬ  
 ゆくと共に先驅は徐々と動き始め、化粧砂美しく敷  
 きつめられたる御道筋を練り行く、長き槍先に翻る  
 紅白の旗幾百流、心なしに打うなだれたり陸海軍々  
 人相次いで蜿蜒長蛇の如く闇の中より出で、行進す  
 實には武夫の心言ひ合さねど打萎れて蹈む足さへも  
 力なければ砂を蹈む靴の音だにせず物の擦るらん許  
 りに聞わるのみ、間もなく松明はシヅ／＼と二重橋  
 際に差しかゝれり、折しもあれ寂寞なる天地の闇を

破りて一發の號砲は轟き渡りぬ。今靈輜は殯宮をは  
 なれて青山に向はせ給ふ時なり、續いて一發又一發  
 打ち出す弔砲の響き、各寺院の梵鐘の音、闇を縫う  
 て細く／＼漂ひ來る、就中ニコライ堂より撞き出す  
 鐘の音には一種不可言的の感を催さしめ、天柱爲め  
 に動じ、地維爲めに哭するの思なき能はきりき、漸  
 くにして二重橋の彼方幽かに靈輜を拜し奉れり、軍  
 樂隊は忽ち「哀の極」を吹奏し堵列兵英國海軍儀仗  
 兵等は一齊に捧銃し、我等は誠恐誠惶、最敬禮をな  
 しぬ、笙篳篥の樂の音は啣々として絶わす響き渡り  
 ぬ、恐る恐る拜し奉れば、松明の御道筋を照し奉る  
 後に白布を以て清げに打飾られたる心なき牛の歩さ  
 へ穀艸として靈輜は靜かに進御あらせらる、力なき  
 篝火の光に精しくは拜し奉らねど、夕顔型御黒塗の  
 大きな靈輜の御前に飾れる、黄金色の御紋章菊花  
 と花菱とは眼も眩せんばかりに輝き渡る。あはれ英  
 靈此の中に安らかに眠らせ給ふと思へば咫尺に迫り  
 奉りて今更に明月の碧海に落つるが如く、黒塗の御  
 輓緩やかに廻るとき、云ひしらぬ哀音陰々として軋  
 る。之を聞いて感慨無量ならざる者やある。

御名代の宮殿下をはじめ、列強の代表者、大喪使事務官其他朝野の顯官數千名悉く大禮服にて萬丈の蜀錦を延げるが如く絢爛眼も綾に窮するに似たり斯くて長き長き御鹵薄の人々漸くに盡くれば其後には陸海軍儀仗隊、英國儀仗隊等も打従ふ最後は海軍々樂隊、横須賀鎮守府聯合大隊悉く銃を吊して殿す、蜿蜒一里に餘れる大鹵薄は午後九時五十分全く二重橋前を離れたりこゝに解散の命は下りぬ、あはれ人散じ更闌けて電燈の光のみ幽かに御轍を照し、大内山の邊夜色益深くして御苑の松林瑟瑟たるを聞くのみ干一時、宿に歸る。

御製

「春秋に花に紅葉に戀しきは

馴れし都の住なりけり」

噫先帝陛下には四十有五年の久しき住み馴れ給ひし武藏野の花も紅葉も後にして遠く西の方伏見桃山の靈地に永へに安らげく鎮まり給ふなり。斯くて東京に於ける御大葬も全く終りを告げ十五日歸路に着きぬ。

## 忠海出張につき左に同

### 僚諸君に御報告致候

九月十二日

小島伊佐美

故桑野君は去月末以來廣島縣下忠海町菊池弘治氏（故桑野君の同窓にして目下同地衛戍病院長たり）方に滞在中去る六日午後五時頃同氏等と圍碁をなし終りて常の如く夕食前海水に浴せんがため出て行き海岸（寧ろ小川の河口幅四五間河底砂より成り降雨なきときは全然水なく満潮の時は海水入り來りて二三尺の深さとなる）に於て膝つきながら金盃にて海水を上体に灌きつゝある中兩手を舉げ二三回無意識に之を動かしたる如き舉動をなし其儘水中に入りたる由にて之を見たる兒童數名直ちに一丁許り隔りたる小學校に之を報告したるを以て當直教員直ちに漁船をして搜索に取りかゝらしめ其中菊池氏等も馳せ來り水中に入り探索すれども見當らず警察署町役場より來り漁夫數十名を督し大網及び錨綱（之は錨八十個許を結び付けたる網なる由）を入れて海底を探ること翌朝四時に及びたれども遂に何等の効なく依

て一旦撤退し更に午前六時より午後二時まで風雨を  
 冒して搜索せしもなほ発見するを得ず其中潮流悪く  
 なりたるを以て前日と同潮流の時を持つて試みれば  
 或は発見することを得んとて五時頃に至り三たび探  
 索に取掛らんとするとき不圖草魚釣をなせるもの、  
 針に觸れたるものあり依て之を搜索船に知らせたる  
 に何れもそれに相違なしとて之を引上げたるに果し  
 て人間の死體なりしが僅か二十四時間なるに拘らず  
 身体各部殊に胸部甚しく魚族の損傷する所となり顔  
 面も之によりて同君の遺骸たるを識るを得ざる程な  
 りしも他の部分によりてそれに相違なきを認定し得  
 たる由齒は堅く噛み腹は膨脹せず依て死因は溺死に  
 あらずして水浴中に起りたる腦貧血なりと菊地氏は  
 断定せり屍体は引上後直ちに火葬に附したる由九日  
 全令兄桑野正令妹桑野タカ小暮マキの三氏相前後し  
 て來着せらる依て小生の特に學校より派遣せられた  
 る旨を傳へ吊辭を述へ吊慰金を進呈せり十日令兄正  
 氏と同道署長町長始め搜索及び葬儀に關し特に盡力  
 せるもの二十名計を歴訪し謝辭を述べたり夕刻は同  
 地の風習として水死者あれば必ず各戸より幾分づゝ

の寄附を集め海岸にて施餓鬼會を營む由にて今回も  
 同君のために其會催はされしにより小生も臨席せり

## 入 學 式

九月十二日濟美館で入學式があつた。本年は不幸に  
 も喪章を附けて互に相見ゆるに至つたのは實に悲し  
 い次第だが、三百有六名の新入學生諸君を迎へた事  
 は又さすがに喜ばざるを得ない。校長及總務は御大  
 葬參列の爲め先達てより上京してゐるので、由比教頭  
 校長に代つて一場の訓辭を述べられ總務代理として  
 は中村重喜君が縷々として述ぶる所があつた。それ  
 から新入學生總代の答辭及挨拶があつて型の如く式  
 はすんだ。

教頭の訓辭の要旨は高等學校時代は發表の時代でな  
 く吸收の時代だから出来るだけ先生なり書籍なりよ  
 り知徳を吸收すべしと云ふのであつた。尙附言とし  
 て諒闇中の一般心得を示された。中村君の演説は、  
 從來の剛毅朴訥の校風は事實上形式的で精神がな  
 かつたので此際之を改良するか或は他に之にかふるよ  
 きものあらば責任を負うて斷然之を捨つるも可なり



要するに堅實なる校風を作るべし是特に新入生諸君に望む所なりといふのが其趣旨であつた。なにしろ例年のかはつて目立つたものであつた。記事を終るに當り新入生諸君の健康と奮闘とを祈る。

## 遙 拜 式

九月十三日の夜十一時、職員生徒一同謹んで遙拜式を行へり。其夜のさまをいへば先づ武夫原の丑寅の方に當つて神籬ひまを設けたり。こは先帝の御靈齋ひまの出てます東京は熊本よりは丑寅に當ればなり。其前に高張提灯二つをたて、少しく明りをとりたれば、闇の中にもいとほのかにそこを見やられたり。こゝより未申の方甘間ばかりの處に又高張提灯を立て、生徒の集合場とし職員は此間にて戌亥の方に集まらるゝことなり。生徒の所作進退は提灯にて合圖をなす。すべて無言の禮と定められたり。さてこの夜は十時頃より曇りし空はやがて雨となりしが十一時頃になりて雨はたと止みければ職員生徒各定め場所につきぬ。物皆しづかにて高張提灯の火影つゞきまにまゝたく。官位の次第のまゝに職員の拜禮終れば合

圖の提灯靜にあがりて三年よりつぎ／＼に横隊にて進み一間ばかりこなたより恭しく拜禮をなす。今し御靈輜ひまは帝都を出でたはしますらむとしぬび奉りし心地いつのよか忘れ奉らむ。あはれと聲さへいで、靜に立ち分れぬ。時は十一時半すぎばかりにやありけむ。よくも覺えず雨ふたゞびふりいでぬ。

## 桑野教授追悼會

桑野教授追悼會—九月二十七日午後三時、龍南會主催、淨行寺に於て故桑野教授追悼會を行ふ。杉山教授の追悼演説、小島教授の先生の履歷書朗讀、大津留總務の追悼辭あり。終りて和尚の讀經の中に各先生の焼香あり。質素なる茶菓の饗あり。會する者無慮二百、故先生の風格を偲びて散會せり。杉山先生の演説大要左の如し。

斯く多數の御來會に就いては桑野君の靈魂も定めて喜ぶならん桑野君は幼にして父を失ひ家庭不如意従つて學問も系統的ならず獨立獨歩今日に及び君は睡眠時間以外本を離さず博覽強記世上万般の事或程度までは知らざることなかりき殊に語學

に於ては英佛獨羅典就中清國語を得意に話せり尙  
 近來はアラビヤ語に熱注して窈かに期待する所あ  
 りしに志半ばにして永眠せられたるは誠に君の遺  
 憾永へなるべく學界の爲より云ふも惜んで餘りあ  
 り君同僚間に屢常識論を唱へ居たれども時として  
 は君自ら常識を逸せることなきにしもあらず即ち  
 矛盾點無しとは必ずしも認められず然れども其性  
 質が廳て天才家なることを示せるにはあらざるか  
 要するに蘊蓄せる有爲の才を齎して突如幽界に入  
 れるは同僚は勿論學界に於ても痛恨の至りに思ふ  
 なるべし云々

すめらきみしらしましけむ大御代の

姿のまゝに晡れし空かな

(水穗)